

A-2 山元町坂元中浜地区

2012年5月31日(木)

報告者名	兼城 糸絵	被調査者生年	1948年(男)
調査者名	高倉 浩樹	被調査者属性	宮司(A-4・A-5話者①)
補助調査者	稲澤 努・兼城 糸絵		

話者であるCTさんのライフヒストリー

坂元の駅前に実家があり、そこで昭和23年に生まれた。父親は日本通運にて勤務していた。亙理や南仙台、長町などで勤務しており、退職後に皆から望まれたことを受け神主になった。

話者は坂元小学校、坂元中学校を経て、仙台の高校を卒業した。その後は仙台のいすゞに勤務する傍ら、坂元の天神社に関わってきた。中学生頃から神楽のことや天神社に関わることをしていた。そのため、後で聞くにはよっぽど私が長男だとよかったと言っていたという。しかし、長男が継ぐというしきたりがあるので、しょうがない事だった。

18歳の頃に父親が亡くなり、25歳の頃に結婚し、2人の息子をもうけた。長男は祭り事にもよく参加しており、ヨメゴ(嫁御舞い)の笛を完璧に吹ける。3、4歳の頃に笛にあわせてリズムにのっていた。そこで、4歳の頃におまつりでは神楽面を買ってあげたりした。

当時は岩沼に住んでおり、勤務しながら神楽や天神社の活動にも携わっていた。その頃は祭りも4月3日から第1日曜日へと変更され、祭りが行われる時には事前に連絡がきた。生活センター(現在は津波で流失)で歌や太鼓、踊り等と一緒に音合わせをした。笛を吹く人がいないので、CTさんが笛を担当している。踊りの方は実家で一度獅子頭を舞い、生活センターでも舞った。踊りも好きで、いつかは獅子頭をやりたいと言っていたが、太鼓をたたけと言われて叩いていたこともあった。上背があるので、獅子頭がいいだろうということもあり、獅子頭を学んだ。踊りを専門としているのはTさん。SさんとCTさんは笛を担当していたが、今年からCTさんが笛を担当することになった。

CTさん自身も家に坂元の駅前の本家から分かれた家として、神棚を設けている。毎朝塩や水を交換したりしていた。その神棚の奥に桐の箱にいれた由来書を置いてあった。一度、何かの取材の時に由来書をみせたので手前の方においた、と思っていたが、そこにあったのは新築の際にあげた祝詞だった。

実家には本物の由来書をおいてあったが、津波で流された。CTさん宅にはSKさんと東北大学の先生が調べたやつの神楽のことを書いた巻物と歴代神主の系図の2つがあるはずであるが、どこにいったのかがわからないと述べている。

祭りの前夜祭(宵祭り)について

昔は4月3日が天神社の祭りだった。前夜祭はその前の日に行う。駅前の神主(宮司)宅に集まった。集まったのは長男のみであり、各家の家主であった。40から50人は参加していた。二男、三男は参加できなかった。当時の中浜は集落が大きく、人数を制限する意味もあって、そのようにしていた。前夜祭には白衣、袴や袴を着て烏帽子をかぶって正装で集まる。そして、各家庭から一品料理持参した。

前夜祭の時には、神主宅の「カミダナ」前に集まり、「カミダナ」に奉じてあるご神体に祝詞をあげた。その時には、神主が祝詞をあげ、参加者は正座する。タナの上の外の扉を開け、その中の桐の箱に入ったご神体をくるんである紫の布をめくり、中の桐の箱が見える形にして祝詞をあげた。そして神楽も行った。

祝詞をあげおわると、飲めや歌えやの手拍子で宴会が行われた。それは大層盛り上がった。そして、大体の者が

酔っぱらって泊まっていってしまうが、朝5時頃になると起きて一旦帰ってから神社へ向かう者もいた。

翌朝、6時頃には神社のところで旗を揚げた。当時は、祭りを4月3日（新暦）に行っており、その日はかつて旗日だった。その日が休みであるから、ということでその日にしたと聞いた。それはその後4月の第1日曜日に変わった。それはいつ頃変わったのかは不明である。

話者によると、前夜祭の形態も変わってきたという。まず、一品料理を持ってこなくなったため、CTさんの親戚側が集まって食事の用意をするようになった。昔は各自一品料理をもってきていながらも、CTさん側でもかなりの料理を用意していた。その上、人数が4、50人も来ていたので、親戚も集まってきて用意を手伝っていた。自分の代になると、逆に皆が料理を持ってこなくなった。持ってきたとしても足りるかな？と思うぐらい少しかつた。そこで、テーガタ（裏方で料理の手伝いをする人）が心配して色々料理を用意した。

前述のように、もともと参加者は大体40～50人いたが、自分の代になると氏子・世話役をいれても20人ぐらいだった。手伝いをするシンセキは仙台や岩沼から来てもらったり、地元に住んでいる者（中浜のおじさんやおばさん）が来てお手伝いをしてくれた。

CTさんが小さい頃、飲めや歌えやの大騒ぎをしている最中にお風呂に入ろうとしたが熱くてたまらなかった。そしたら、「なんだ熱いのか」などといいながら参加者がやってきて井戸から水をじゃっぽんじゃっぽん入れてくれた。そんな和気あいあいした雰囲気があった。でも、今では同じ前夜祭でもあまり騒がないし、変わってしまった感がある。

「カミダナ」について

ご神体は神主家の特別な部屋にあった。その部屋を「カミダナ」と呼んだ。子供のころ汚い足で入ろうとすると「『カミダナ』にはちゃんとして入れ」と怒られた。普段はふすまで閉まっていた。もともとご神体は滝の山にあったが、触るとご利益があるので、いたずらされたりする恐れがある。それを防ぐために神主宅でご神体を保存することになった。他の神社もそうだろうが、そういう場合は、石など代替りのモノを山においてある。

日常の「カミダナ」祭祀

神主宅では毎朝水と塩で「ポンポン」と清めた。先々代にあたる話者の父が行っていたが父不在時は母、自分が中学くらいになると自分も代理で行った。毎月25日は、「カミダナ」を掃除することになっていて、念入りに掃除した。その時に、奉納されていた巻物を見たりもした。

部落の人は願い事や相談事があると、神主宅に酒や米、野菜や卵などを持ってやってきた。神主はそれをカミダナにあげ、祝詞をよみ、相談事に対してはアドバイスを与える、ということをやっていた。父は仙台で運送会社に勤めていたので、こうしたことは日曜日が、平日であれば父が常磐線で帰宅するのを待って夜に行った。

祭りの際のご神体移動

祭りのときには、ご神体を滝の山へ持って行った。神主であった父が桐の箱を抱いてもっていった。桐の箱には一般人は触れてはいけない。そこで、万一のアクシデントに備え、神主の息子であった自分が父についていった。その時は父も自分も白衣を着ていた。

「奥の院」設立と現在抱える問題

父が亡くなった後、神主は仙台に住んでいた兄が戻ってきて継いだ。兄でなく、いつも父についていろいろ見聞きしていた自分（三男）が継いだ方がよい、という意見もあったが、やはり長男でなければならないということで兄が継いだ。後に、その兄が病気で余命が少なくなった時、管理する人がいなくなるので、大宰府天満宮にご神体を奉納してこようという話になった。大宰府からは、それ以前からお札をもらっていた関係であった。兄には息子がいたが、海外に行っていたため、すぐ神主を継ぐというわけにはいかなかった。そこで部落長にも相談したが、なかなか返事をもらえなかった。結局、部落の人の中でも特に年配の人たち、氏子の中でももう引退したOBのような人たちが、絶対に大丈夫だから村にご神体をおいてくれということをお願いに来た。最終的に、1人2人では

持ち出せないような大きな金庫にご神体を保管することになった。部落の人でお金を出し合って金庫を買った（兄がなくなったのは昭和57年）。その後、それを置くために天神社の裏側に奥の院を作った。平成4年のことである。その時奥の院をつくった宮大工さんも今回の津波で亡くなってしまった。

奥の院造営時の区長がSIさん。副区長がYさん、会計がSIさんであった。区長が氏子総代を兼ねている。金庫のカギは代々の区長が申し送りをして引き継いでいた。最終的にはMさんに引き継いだ。予備のカギはあったのか？と聞いてみたところ、予備のカギまではわからないと言われた。

今問題なのは、奥の院におかれている金庫をどうやって開けるのかということ。金庫を壊すべきか、それともカギ師を呼んできて開けてもらうべきか。中に何か入っているのが非常に気になることである、ということを経り返し語っていた。

兄の長男と2人で金庫にご神体を奉納する時に、あわせて由来書も書類入れに入れて一緒に納めようと考えていた。金庫は耐火製で扉は大きいのが意外と小さかった。ご神体は桐の箱に入っていて布がかぶさっている状態だったので、由来書を納めた書類箱がおさまらなかった。ご神体は確実に納めた記憶があるが、由来書は書類箱から取り出して中身を納めた記憶がある。ただ、一式入っているかがわからない。いずれにせよ、神楽を再開するにしても金庫が開かないと、と思っているという。

巻物について

神楽のやり方を筆で記した巻物があった。そこには漫画のような絵が書かれており、その横には漢字とカタカナで踊り方などが書いてあったようだ。巻物は「カミダナ」に保管してあったが、奥の院の金庫に御神体とともに一緒に中に入れたと思う。それを見れば、神楽復興の資料にできると思う。だが、金庫を開けないと中身が見られない。カギ師を頼んでカギを開けるか、カギを壊すかして中身をみたいと考えている。

「謂れ」について

親父の代に、中浜天神社の由来をはっきりしたやつを作りたいということでSKさんが何回か通ってきた。今思うと、当時SIさんとともに、東北大の先生が数回調査にきていた。それで、その時の話をもとに神社に立ててある「謂れ」を作った。先生たちは昭和50年頃から調査に入りはじめて、それから昭和57年ぐらいにも来ていたようである。その先生は郷土芸能を研究しており、先生の名前は三浦さん…なんとか浦という名字であった。

天神社について

神社があるところは滝ノ山という。中浜には天神という地名があるが、昔の天神社はそこに立っていたらしい。そこが火事で焼けて、今の場所に移ったらしい。

(天神社は2つあるのかという質問に対して) 右側にあるのは薬師堂である。奥にあるのは天神社の社。左にもうひとつあるのは、神輿を納める場所であり、奥の院という。社の正面にある板にある由来はいわれ書をわかりやすく書いたもの。現代風に訳したときに合わせて作った。Cさんは文化財の保護委員会もしていたから、今無くなりつつある芸能の無形文化財の調査をしようというときに、調べてくれたものだと思う。

祭りについて

当時、一回御神輿をかついで休憩する際に、湯のみ茶碗で酒を飲んでた。それからまた担いでいく。12軒ほど休憩する場所があるから、大体1升以上は飲んだだろう。神輿は20人ぐらいで担いでいくのだが、酒の勢いもあって普通に歩いて行くよりも神輿の方が早い。神輿は1トンぐらいあるけど、我々が若い時は4人で担いでいた。中浜の神輿は軽いとのことである。

昔はオカリヤザキという中間のところまで神輿を2つ並べて、それぞれの神輿の正面に鏡をおいた。それは、邪悪を反射させるという意味であった。その鏡はカーブミラーのような鏡で裏に模様があった。それも津波で流されてしまった。

神楽について

中浜親友会という青年会を作って神楽をしていた。大会にも結構出ていて、県大会で優勝するとNHKの全国大会に出られるというので皆で本気になって練習した。中浜の踊りは独特だと言われている。それは普通の神楽よりもテンポが早く、足の裏を見せている。どこかの大会の審査の時に評価があったのだが、神楽で足の裏をみせるのは正しいかどうか、と二分したことがあった。中浜はテンポが速く激しい踊りだから、足の裏をみせることになる。踊りと言えば、鯛釣舞あるいは恵比寿舞いでは老人の面を使用して踊るのだが、中浜の鯛釣り舞は激しい。面も若々しい。

流失した面や道具について

太鼓は日本財団から援助してもらえた。ただ、太鼓をお披露目するのにお披露目する機会が得られなかった。お披露目をしたくても、踊り手がいないと、そして踊り手がいても被る面がないと・・・という状態である。なので、まだお披露目はしていない。先日行われた部落総会で「太鼓をいただきました」という報告はした。

CTさん自身は趣味で彫り物をしている。最近は仙北に伝わっているカマガミサマを彫っているのだが、それは準備期間であり、できれば中浜神楽の面を彫りたいと思っている。今は技術がついていかない。カマガミを彫っている師匠や仲間などで色々話をされていて、特に中浜天神神楽の話が出てくるのだが、かなり昔に製作した面だから、例えば天狗の面にしてみても、インターネットなどで資料を探して出てくるのは今風の天狗面になってしまう。頭に入っているヨメゴの面とはやはり違う。昨日も秋保工芸の里にいる先生を紹介してもらったので会いに行っただが、その先生も体が悪くて断られた。面を彫ってほしくて人を捜しているのだが、簡単には見つからない。とはいえ、彫ってもらえる人と出会いたいし、簡単に妥協したくない。80代や90代のじいちゃんばあちゃんたちにも、一刻も早く見せたい。

行政の担当者とお話

民俗文化財の復興に関わる行政からの支援援助を支援する体制があるという説明をし、衣装の購入等を具体的に検討してもらえないかという話をする。

笛と太鼓などはあるけれども、やはり面がないことがひっかかる。面はどこにでもあのような面ではいけない。参考になるような写真があればいいかと思うが、中浜の集落が津波で流失してしまったので、写真などもみな流されてしまった。さしずめ、町側の資料を見ながらやらないと行かないとダメなのかな、ということを考えている。映像資料が町側にあるとされているが、その具体的な所在はまだ確認されていない。やはり資料がないために、見積もり書なども立てようがない。12の舞があるが、1つの踊りで面が2つや3つはあるから、15、6はあるかもしれない。例えば、鬼の面も普通の鬼の面ではなく、作られた年代が違うから、今の鬼の面にはないような顔をしている。写真として残っている物は再生可能かもしれないが、そうでないと中浜独特の面を復元するのは難しいのではないかと心配している。

衣装も神楽用についても、新しく購入するにあたって模様等をみて以前と一緒のものかどうか判断できるかはわからない。そういう作業は私たちよりは、地元のおばあさんとかで神楽に関わってきた人に見てもらった方がいいのかもしれない。

子ども神楽

(子ども神楽を発表する機会はあるのか、という問いに) 学校の授業として行っているのだから、校長がするといえざる、という具合である。それに加え、山元町が主催するほつき祭りや夏祭り、坂元大好き鎮魂祭などで演じた。BS3の「きりり!えん旅」という番組(6月14日放送)で子ども神楽が紹介された。運動会で中浜は神楽、坂元は鼓笛隊を発表した。子どもたちは年々卒業して新たに進学・進級してくることを考えると、毎年1からのやり直しという感じである。一週間ほどカメラが入ってきたので、練習がうまくいかなかった。学校で練習しているということもあって、実際には授業との兼ね合いから十分な練習時間を確保することができなかった。学校でも、坂

元小学校と中浜小学校が一緒になって勉強しているが、なぜ中浜小学校だけ神楽をしているという声がいくつかあがっているようだ。子ども神楽は T さんが踊りの指導を担当し、CT さんは太鼓を担当した。笛は S さんが担当している。

滝の山への避難経験

昭和 33 年の洪水のときなど、滝の山に避難した。それは 9 月の台風で、死者も出るようなものだった。消防団も助けにきたような記憶がある。戸花川の堤防決壊などは、昔はしょっちゅうあった。

龍洞山東光寺について

龍洞山東光寺というお寺があったが、それは焼失した。ミヨコインの後ろにあって、そこにはお坊さんの墓がいっぱいある。記念碑とか色々あるのだが、全部読めない。



写真 1 坂元支所にて行った聞き取り調査のようす



写真 2 坂元支所で出された今年収穫された山元町のイチゴ